

言語の起源と人間行動に及ぼす効果に関する研究

A study on the language origin and its effects to human acts

発表者: 小山 照夫 (情報社会相関研究系)

by: Teruo KOYAMA (Information and Society Research Division)

研究の概要

人間は、他の動物と身体構造上の連続性を持ちながら、唯一言語を持つ存在である。そこで人間だけが言語を獲得できたのはいかなる理由によるものかが問題となる。

言語のような複雑な情報構造が突然に出現することはありそうにもないことから、言語構造を原初的なものから出発して、種内淘汰によって発達させる過程が存在したはずである。ここでは言語使用が種内で有利に作用する構造が存在したことが想定される。言語使用が有利に作用する状況として分業の形での共同作業を考えるなら、その条件として

1. 多様な身体運動の可能性
2. 高度に分節した音声操作能力
3. 共同作業を可能とする社会性

が必要となる。人間は直立可能な身体構造によって、自由度の大きい声帯と両手使用が可能となっている。このような動物が、共同作業を行える程度に高い社会性を持つならば、そ

の特徴を生かして環境適応性を高めることにより、生存に有利な状況を構築してきたと考えることができる。

人間が言語を使用し始めた段階では、その構造は単純なものであったとしても、言語使用によって生存に有利な条件が加えられるなら、やがて種内淘汰の結果として、複雑な言語情報処理構造を獲得するに至る。

分業という形で言語を使用する効果として二つの帰結が考えられる。一つは外部に向かって示される言語は、受け手の行動を期待してのものだということであり、もう一つは記号を介して、感覚で捉えることのできない事態を内部的に構想できるというものである。前者は人間の外部言語使用に関する新しい視点を提供することになるし、後者は人間の思考のあり方と内部で操作される言語構造の意義に関する新しい視点を提供することとなる。

<http://research.nii.ac.jp/~koyama/official/lang/>

情報学の広がり

人間の扱う情報の多くは、言語によって記述されている。情報の問題を扱う上で、記述の基本構造を規定する言語に関する基本的理解を深めることは、これからの情報学にとっての重要な課題である。言語の基本構造に関しては、言語学や言語哲学など、いくつかの観点から議論が行われているが、言語という実体が完全に解明されたわけではない。言語に関するより深い理解のためには、従来とは異なる方法論が必要とされている。

本研究では、言語のそもそもの起源に関する仮説を立てた上で、言語とはそもそもどのよ

うなものであり、それは人間の思考と社会にどのような効果をもたらしているのかという問題について、検討を進めている。

言語の起源と言語が人間にもたらす効果について考察する事を通して、情報を解析する上での言語の機械処理に関する方法や、言語で記述された情報の、人間と人間社会に対する効果という、情報学の基本問題を考察するための新しい視点を明かにして行く。